

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Raphia Dying and Weaving by the Kuba, Zaire

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井関, 和代 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00003640 |

ザイール・クバ族のラフィア染織

井 関 和 代*

- | | |
|----------------------|-------------|
| 1. はじめに | 1) ラフィア糸の準備 |
| 1) 調査の目的 | 2) 製織 |
| 2) 調査地とその対象 | 3. 布の仕立て |
| 2. ムシェンゲにおけるラフィア布の製作 | 4. 結びに |

1. はじめに

1) 調査の目的

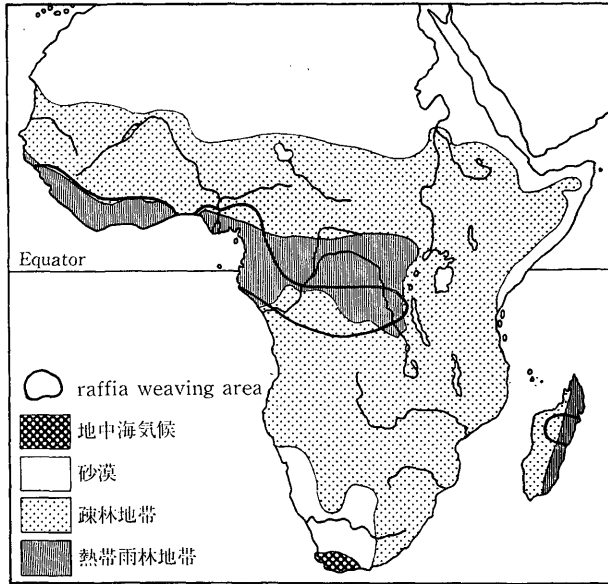
1988年2月から3月までの約1カ月間、ザイール・カサイ州ムエカゾーンに居住する、クバ族のラフィア布についての染織調査を行なった。この調査の目的は、西アフリカから中央アフリカに分布する、垂直機によるラフィアの製織技術を明らかにしようとするもので、すでに1986年12月から翌年3月にかけて、カメルーンやザイールの幾つかの集落でも調査を行なっている。

ラフィアとはマダガスカル原産のヤシ科の植物で、中央アフリカからギニア湾沿岸の熱帯雨林地帯、あるいはギニア・サバンナの河川沿いや湿地、沼地に生育する。この広範囲に分布するラフィアヤシには、*Raphia vinifera*, *Raphia ruffia* など6種類以上がある。そして、この植物の利用も多く、葉からロープや漁労用の網やワナなど、果肉は魚を捕獲するための毒薬に有効であり、樹液からもヤシ酒がつくられる。また、ヤシの主脈(軸)は建材や家具に用いられる。本調査のテーマとなるラフィア製織もまた、このヤシの葉から得る繊維を素材とするものである。

今日、西アフリカで手織りに使用される主な繊維は木綿¹⁾であるが、これらの地域

* 大阪芸術大学芸術学部

1) 11世紀の古ガーナ王国の綿について、アルバクリ (Al-Bakri) の記録が残されている。また、14世紀に古マリを訪れたイブン・バトゥータ (Ibn Battūta) の旅行記にも、西アフリカの王様や、北アフリカ文化の影響を受けたイスラム教徒の間では、木綿の衣料を使用していたらしいことが、記述される [川田 1979]。



地図1 アフリカの植物帯とラフィア織地域

に木綿が移入される以前の繊維素材の一つとして、ラフィア繊維が利用されていたと考えられる。これは、木綿を織る一般的な水平機とラフィア繊維を織る垂直機の起源や構造から考察されるもので、ラフィア繊維による織技術が、この地域における古い文化層としてみることができるのである。また、その技術分布も広く、シエラレオネ (Sierra Leone)、リベリア (Liberia) からギニア湾の海岸線に沿って、ナイジェリア (Nigeria)、カメルーン (Cameroon) など、そして、中央アフリカのザイール (Zaire) までの諸国、さらにはマダガスカル (Madagascar) で、現在でもラフィアから織物や様々な編物が作られている (地図1)。

しかし、古い染織資料は現存せず、僅かにベニン (Benin) で13世紀頃の遺跡からラフィア繊維とおぼしき出土品があった [CONNAN 1975] と、報告されるのみである。そして、ヨーロッパ人の初期の報告に“草”による衣類や織物として言及されたものが、ラフィア繊維であるとされる [PICTON 1979]。だが、17世紀初めのコンゴ (Congo) 王国やアンゴラ (Angola) から、ラフィア布がポルトガルにもたらされたり [CAVAZZI 1687]、同様にガボン (Gabon) やベニンからも16, 18世紀に運ばれたものが現存する [RYDER 1969]。その後、19~20世紀の資料については、ヨーロッパ各地の多くの博物館に収集され、また、近年、調査研究がすすみ [LAMB 1980, 1981, 1984]、次第に、その製作の様子が明らかになりつつある。

調査地となったザイールでは、15世紀頃からポルトガル人が現われ、すでに触れた

コンゴ王国との交易がはじまり、この初期の航海誌にヤシの葉で作った腰布と、ラフィア布についての報告がある。その後、1885年からのベルギー王レオポルドの私的植民地を経て、1908年にベルギーの植民地として支配されるようになった、その前後から、本格的な民族学研究調査がさかんになり、E. トルディの“*Notes ethnographiques sur les Peuples communément appelés Bakuba, ainsi que sur les peuplades apparentées; Les Bushongo*” [TORDAY 1910] の報告によって、ラフィア布の製作が明らかになった。以後、クバ(Kuba)族をはじめとする、ザイール国内の他の部族のラフィア布についても、幾つもの研究報告²⁾がなされた。その結果、アフリカの伝統的染織品の代表的な布として、ザイールのラフィア布、とくにクバ族の織布が知られた存在となった。

このような資料からザイールや他の国々における、ラフィア布の製作の様子を窺うことができる。例えば、カメルーンなどの西アフリカの織機が矩形の垂直機であること、ザイールやガボンの織機は、上・下梁棒に経糸を張る原始的垂直機であること、等々。しかしながら、これらの研究の多くは民族社会学の立場から観察されたものであるか、あるいは近年のJ. コルネ氏の業績である“*Art Royal Kuba*” [CORNET 1982] のように、文様・衣装といった芸術の領域から捉えたものが多い。そのため、ラフィア布の製作技術については、概要的な報告が多く、十分な検討をなしているとは言いがたい。また、具体的な作業について記述されず、織技術などに差異がないかのような印象を与えられる。さらに、すでに報告された資料から、技術を通じての民族学的な比較研究がすすめられている様子もみうけられない。

また、これまでの染織学における手織機の研究は、単に、織機の構造や操作が取り上げられ、垂直機の「経糸」、つまり、素材となる繊維にはあまり留意されていなかったように思われる。これは、現存する伝統的手織布のほとんどの経糸が、長繊維(草・樹皮)や短繊維(木綿など)と、その採線方法が異なるものの、いずれもが撚りをかけた「糸」を使用していることが、その一因となっているのかもしれない。しかし、ラフィア布を観察すると、その経糸に「撚り」がなく、線状のラフィア繊維を見る³⁾。とすれば、撚糸技術が発達する以前の、線状繊維による製織が現在でも続いてアフリカに伝えられていることになる。

このような繊維や織技術の相違を比較することは、この地域の染織技術の発達状況を知る手掛かりとなる要素と考えられる。

2) [Loir 1935] など。

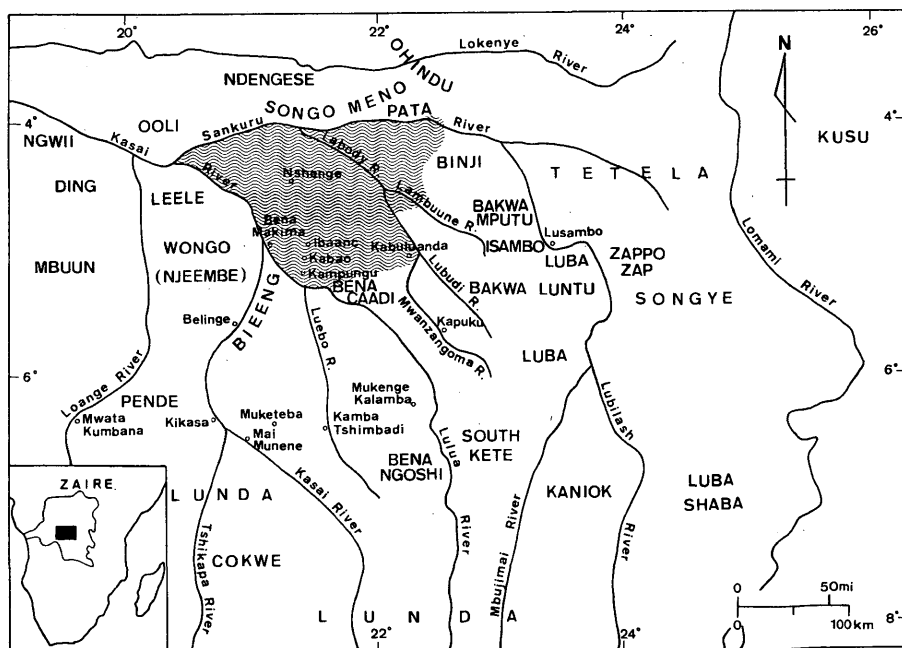
3) ただ、[Picron & Mack 1979: 37] には、マダガスカルでのみ、ラフィア繊維に撚りをかけると記述される。

そこで調査は、先ず、各地で行なわれている、ラフィア染織技術を明らかにし、次に、この技術《特に垂直機の操作》の比較をすすみ、西アフリカから中央アフリカに広がる垂直機の技術体系や関連性の考察を行ないたいと計画するものである。そのため、調査は、ラフィア染織の基礎研究となるべきものとして、現地のカメルーンやザイールにおいて、できるだけ多くの資料・情報採集することにした。

本稿では、これらの調査資料のうちから、ザイール・クバ族のブショング (Bushoong) グループから入手した、染織技術を報告することにした。

2) 調査地とその対象

幾つもの河川が縦横にはしるザイールの国土にあって、かつてコンゴ河とよばれた大河ザイールにそそぎ込む、カサイ (Kasai) 河とサンクル (Sankuru) 河の出合う三角地帯・カサイ州ムエカ (Mweka) ゾーンは、この森林地帯において、広がった草原の様相を呈する地方である。このムエカゾーンに居住するクバ族は、ラフィア布による豪華な伝統的な民族衣装を創り出すことで知られ、他の周辺の部族からバンバラ (Bambala)、つまり布 (Mbal) を(纏う)人々を意味する名称で呼ばれている。このクバ族の存在を始めて記述したのが、1600年初頭のイギリス人の航海士 Andrew Battell である。その後、1908年にこの地を訪れたトルディ [TORDAY 1925a] によって、彼



地図2 調査地

らの歴史が記録されている。

伝承によると、この地方にクバ族が居住するようになったのは古く、14世紀頃にサンクル河を越えた北方のウバンギ (Ubangi) 河とシャリ (Chari) 河の流域から、建国の王ウオト (Woot) にひきいられて現在の地に移住してきたという。そして、17世紀の初めに中興の祖シャンバ・ボロンゴ (Shamba Bolongongo) 王によって王国が再編制されたと伝えられる。また、このシャンバ・ボロンゴがカサイ河を越えて東方に巡行した際に、ペンデ (Pende) 族の行なっていたラフィア染織の技術を持ち帰った、と伝えられている。

このクバ王国は、現在、政府から伝統的な統治権が認められ、シャンバ・ボロンゴから数えて第22代目 Kweet a-Mbwook a-Shyaang a-M-baot 王 (Kwete Mbokashanga II 1941年生) によって治められ、王 (Nyim) の率いるブショング (Bushoong) グループの他に、17のグループからなる伝統的首長が、王国を形成し続けている。調査はこの王都ムシェンゲ (Mushenge) を中心に行った。

ムシェンゲ村は、ここに居住するブションググループや、他のクバ族のグループが集まり、村はさながら平城京のように、宮殿 (Dwengy) からのびる大路を左右にして、各戸の区角 (Laan) が並んでいる。村人の生活は農業を主として営まれ、ときおり狩猟も行なっている。また、その余暇があれば、木彫、仮面、籠などの工芸品づくりに精をだす。ことに儀礼用衣装や装飾品は、死者の再生を信念とする彼らの中において「生涯の終りに近づく頃には葬られる時に着けて恥かしくない、立派な衣裳の一式を完成しなければ」[渡辺 1985] と、その製作にあけくるといっても過言ではない。事実、村内のいたるところで、垂直機でラフィア布を織る男たちや、大小さまざまな布を仕立てる老若男女の姿を見ることができる。

調査は、宮殿に隣接したタタム区角 (Laan・Tatam) に住む織職人のマンチュマ・クム・ウオト (Mantshuma Kum Woot, 70歳?) の仕事を主に観察した。彼はバンギェン (Bangyeen) グループのブアレ (Bualel) 村の出身で、同じラフィア職人であった父親が亡くなった後、母方の叔父のもとで、その伝統的技術を習得した。現在は妻の出身地のムシェンゲでくらしている。また、妻のペレンゲ・クエテ (Pelenge Kwete 年齢不明/Bushoong) は、ラフィア布の刺繍作業を行なう。この作業場となる一角にも、多くのラフィア工芸職人がいる。

この作業場で、ムシェンゲにおけるラフィア衣装の製作に関する、繊維採り、製織、仕立てなどの作業を順次記録した。また、補足的調査として同村のバヴェル (Bvel) 区角のバンチィ・ボペ (Bantshi Bope 40歳/Bangongo) の作業の調査も行なった。彼

は経糸の開口操作によって布に文様を織りだす——紋織 (shiing) を、つくることが得意とする。また、同村でラフィア布製作に従事するものたちにも、順次、聞き取り調査を広げ、資料の入手につとめた。尚、他のクバ族グループである、サンクル河沿いに居住するショウワ (Bashoowa) グループの村々を移動調査した。

調査の聞き取りの際には英語で行なったが、伝話による補足や確認に、国立音学大学・助教授渡辺公三氏の御協力を得た。

2. ムシェンゲにおけるラフィア布の製作

1) ラフィア糸の準備

a. 採取

ムシェンゲ村のラフィアヤシ (La/Ma-bwoon) は、畑または野で出芽したものを苗木 (Baan Mabwoon) として、ラフィア林 (Kel Mabwoon) や屋敷内で生育させる。葉は羽状複葉で、葉身 (La-piok/Piok) は針形をしている。この葉の新芽、つまり幼葉からラフィア繊維を得る。1, 2年で葉身が約60センチの長さに育つようになると、これを刺繍用に使用し始め、3, 4年目以降の成育したヤシの葉身は約1.5メートルで、これを製織に使用する。さらに、6, 7年過ぎると、ヤシ酒 (Maan ma

・ラフィア糸の準備

| | |
|------|-------|
| a. 採 | 取 |
| b. 葉 | の 選 別 |
| c. 織 | 維 採 り |

・製 織

| | |
|------|-----------------|
| a. 経 | 糸 の 準 備 |
| b. 機 | 枠 部 へ の 取 り 付 け |
| c. 製 | 織 作 業 |

・布 の 仕 立 て

| | |
|------|-------------|
| a. 縫 | 糸 の 準 備 |
| b. 砧 | 打 ち |
| c. 刺 | 繍 お よ び 縫 合 |

表1 ラフィア織布の製作行程

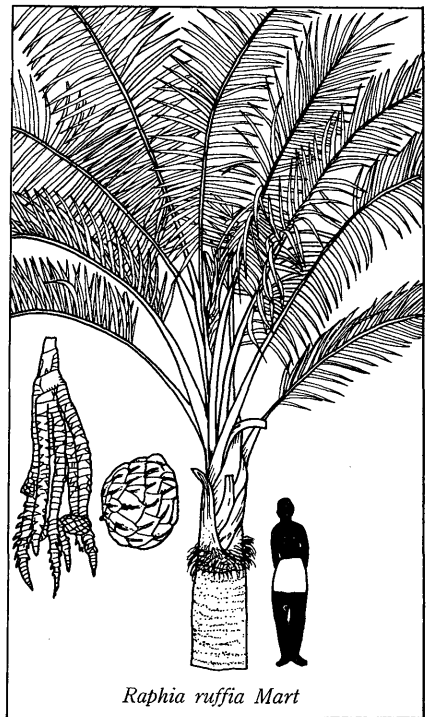


図1 ラフィアヤシ

Mabwoon)を採取する。その後、ヤシが枯れるとまた新しい苗木を育てていく(図1)。

織職人たちの作業は、まず、このラフィア繊維を得ることから始まる。彼らは、製織するのに必要な量をラフィア林に採りに行く。なかにはラフィア林を所有しない織職人もいる。この場合は、一抱えの葉身(80~100本)を1束とし、その葉身の品質で価格は異なるものの、5~10 zaires (1 zaire=約 ¥1.8, 1988年)を単位にして購入する。

採取は、成育したヤシの新芽を選んで行なわれるが、その葉身は葉柄を芯にして折り重なって閉じ、まるで槍のように尖った状態で出芽する。この新芽が直径約6, 7センチ・長さ2~3メートルの頃になると、その重なった幼葉の下の方から、まず、数枚の葉身を取り外し、これを葉柄から引き剥がす(aat Piok)。重なっていた幼葉身は、まだ、陽に当たっていないため、全体が淡いライトグリーンの柔らかな色合いをしている。順次、葉柄の下部分から上部へと、幼葉身を採取する。

そして、十数本のヤシから必要量の幼葉身を得ると、これを作業場に持ち帰る。

b. 葉の選別

採取した葉(以後、繁雑をさけるため、葉身を「葉」とする)からラフィア繊維(Piok)を採る作業となる。この時、採取した葉の量が多い場合は、小1時間の作業量の葉を取り分け、残りを木陰の下にバナナの葉などで包んで置き、葉から水分が抜けるのを防ぐ。

新芽の葉は、閉じて二つに折れ、さらに他の葉に重なり付着した状態で出芽する。そのため作業は、葉を1枚ずつに離すことから始める。

まず、葉柄に接していた部分を左手に持ち、葉先を前に出す。そして、右手で葉1枚を剥がし、その手を魚釣の竿を操るようにして振ると、変形のZ字のように重なっていた葉が、次第に葉柄部から葉先へと外れる。順次、葉を1枚ごとに整える。

次に、この1枚ごとにした葉を束ね、葉柄部を下にして抱かえ、地面を叩くようにして揃える。そして、その葉先の部分を掴み、力強く手前に振る。すると、葉先を掴まれていなかった短い葉が地面に落ち、手に残った葉を束ねて置く。落ちた葉を集め、これを繰り返して、葉を長さ別の三つのグループに分ける(ashang'l Piok)。

最も長い丈の葉は経糸用、次に緯糸用、刺繍用とする。

c. 繊維取り

長さ別に分けた葉を職人の脇に置き、この1枚を取り出し、この葉先を手前にして持つ。そして、二つ折れになって閉じた葉の葉先部分を広げる(anam'l Piok)。そし

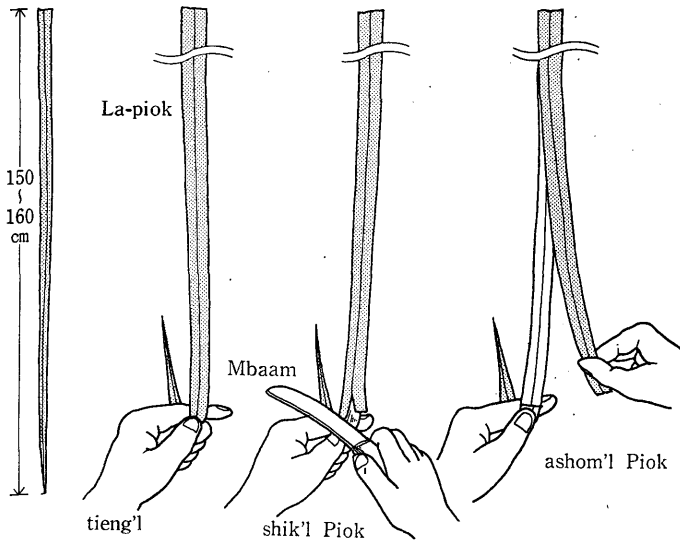


図2 ラフィアの幼葉身より，繊維を採る作業

て，葉先約10センチのところを，左中指と人差し指の間に挟む。この時，葉表が上になるようにして，葉先を折り曲げ，親指で止める (tieng'l)。次に，この折り曲げた部分にナイフ (Mbaam) を当て，葉の表面を削りそぐようにして切る (shik'l Piok) と，

葉表部分 (Ndiem) と葉裏面の皮膜に分かれる。この葉表部分を右手で持ち，さらに皮膜と葉表部分を割くようにして，3, 40センチの皮膜を引き出す (ashom'l Piok) (図2)。



写真1] ラフィア繊維を表皮から剥がす作業

次に，この葉先を足の親指に絡め，葉柄の部分を引くようにして，右脇に置く。そして，次々と，新しい葉から皮膜を採り出す作業を繰り返す。通常，足の親指に絡めた葉先が適量になると，重ねて置いた葉柄部分を束ねて持ち，これを強く引く。すると，足で支えている繊維 (以後，皮膜をこう呼ぶ) と，葉表部分とが剥がれていく (写真1)。

幅4, 5センチのテープ状に採り出された繊維の束は，足から外し，葉先

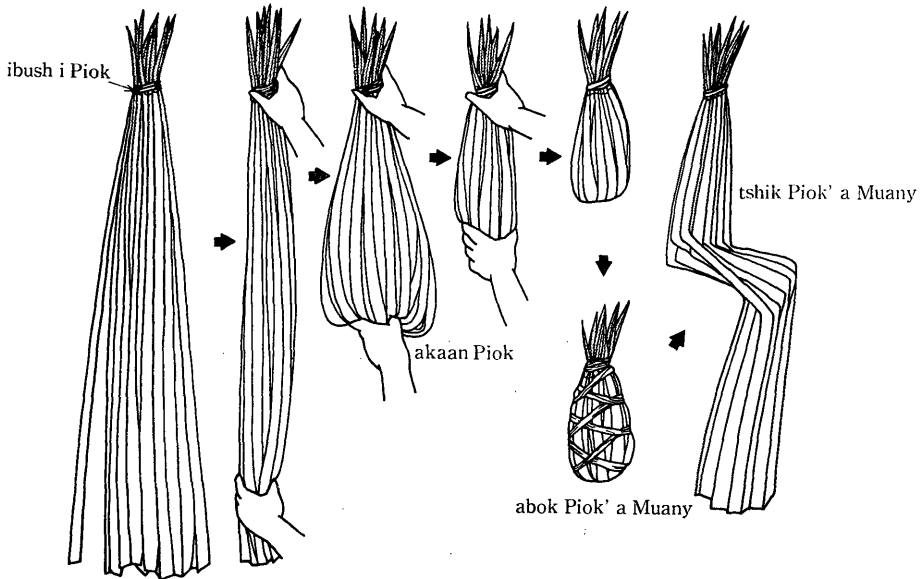


図3 ラフィア繊維を乾燥させる作業

を整える。その中の1本の繊維を取り出し、これで葉先を束ねて括る (ibush i Piok)。そして、これをたぐるようにしてたたみ込む (akaan Piok) と、これを丸めて括り、陽の当る所で乾燥させる (abok Piok' a Muany)。これは、繊維に含まれている水分を急に乾燥させると、テープ状の繊維が丸くなってしまうことを防ぐためと思われる。そのため、水分のなくなる僅かの時間で繊維をほどこき、これを広げて干す (tshik Piok' a Muany) (図3)。またこの乾燥の際に、何度も、広げてある繊維の束を動かす。繊維が乾燥すると、これを輪状に束ねて収納し、製織に用いる。

また、他の近隣の村やムシェンゲの村の中には、繊維を織職人に売りに来るものもいる。

2) 製 織

ムシェンゲおよび他のクバ族グループの織り作業は、差し掛け小屋あるいは木陰の下で行なわれる。この作業場 (Ntuum mu Nbwoong a Mbal) となる地面の約2メートル四方の角には、織機の枠部 (Bwoong) となる杭が、4本打ち込まれている。この4本のうち、織作業の前面となる位置に、直径約15~20センチ・高さ40~50センチの杭 (Ikwok i Bwoong) が2本あり、この下には、経糸保持棒を止める横梁棒を填めるための柄穴が、彫り込まれてある。残りの2本が後方にあり、高さ約150センチの雑本が打ちこまれている。そして、この高い杭のそれぞれの上から、長さ約2メ

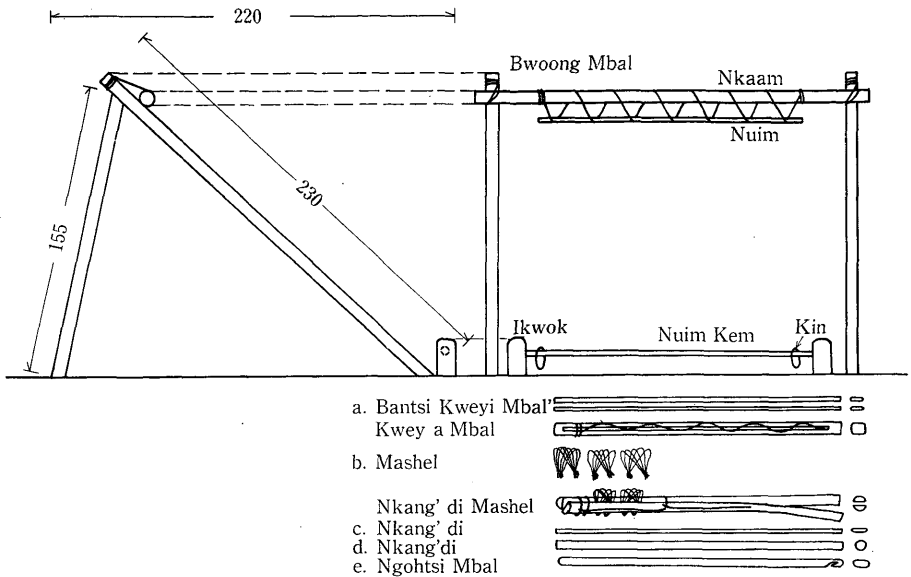


図4 機枠部と織道具

一トルの棒を約35~45°の傾斜で、前方に向けて立て掛け、杭と傾斜棒の先端を紐で結わえて固定してあり、側面から見ると三角を形づくったようになる(図4)。

この枠部に織道具を取り付けて、織作業となる。しかし、日頃は差し掛け小屋の屋根根の上に置き、作業時のみに枠部に取り付けられる横梁棒2本がある。1本は前面の杭の柄穴に取り付ける下部横梁棒(Nuim Kem)、そして、傾斜棒の先端から2、30センチ吊り下ろした紐で、括り止める上部横梁棒(Nkaam)である。この梁棒は枠部のサイズによって、長さが200~250センチと差異があるものの、直径約6、7センチの雑木が使用されている。

そして、製織に使用される織道具の基本となるものは、経糸の開口具の単式輪状ソウコウ(Mashel)、また通称、中筒と呼ぶ可動式の開口保持棒(Nkang'di)、同じ可動式開口保持棒と緯糸打込具を兼ねた刀杼(Ngohtshi Mbal)、そして、文様用緯糸の挿入に使用する可動式開口棒(Nkang'di)などがある(図4)。

この機一式 Bwoong Mbal を用いて、製織(abal Mbal)を行なうが、その準備作業として、機に経糸を張る作業をスタートする。

a. 経糸の準備

a-1. 繊維の下部保持棒への取り付け

機に経糸を準備する際、ムシェンゲでは、まず、経糸を固定するための下部経糸保持棒(Kwey a Mbal)に、ラフィア繊維を取り付ける。

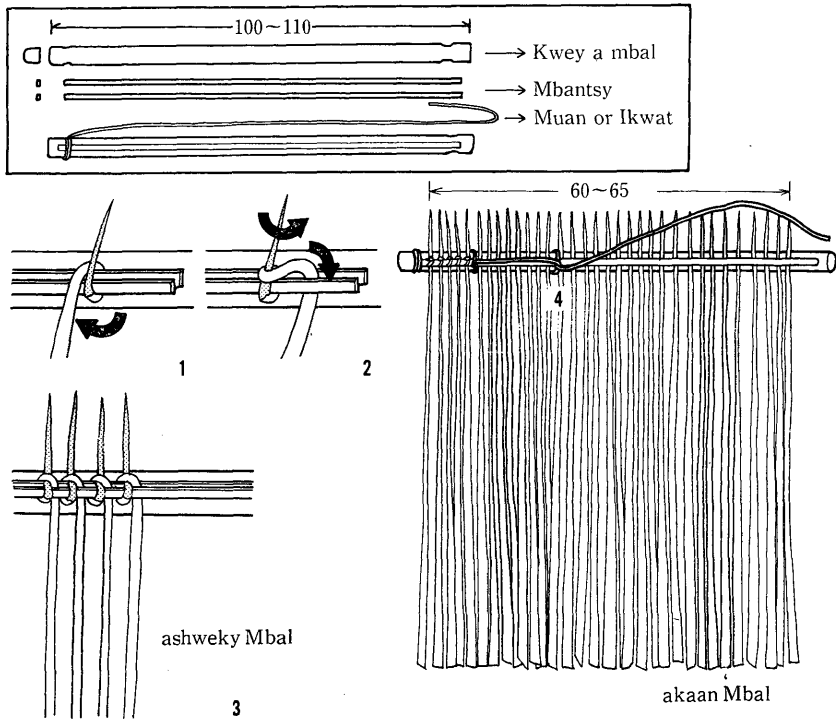


図5 繊維の下部保持棒への取り付け作業

この下部経糸保持棒は、直径約4～5センチのラフィアの主軸を、長さ約1メートルにしたものである。その付属品として、パルミュラシヤシの主軸から得た、幅1センチ、長さ90センチ、厚さ1ミリ強の薄板 (Mbantsy) 2枚と、これらを持ち止める、長さ1.5メートルの細い三編紐 (Muan)、または撚紐 (Ikwat) がある (図5)。

作業は、下部経糸保持棒の左端に薄板2枚を持ち止めて固定し、右端からラフィア繊維を取り付けていく。乾燥したラフィア繊維の束から、先ず、1本を取り出し、その葉先を2本の薄板の下にくぐらせる (図5-1)。次に繊維部分を薄板の間に引き入れ (図5-2)、手前に強く引く。順次、葉先を整えながら、5、60本の葉を薄板に絡めて止める (ashweky Mbal) (図5-3)。

次に、下部経糸保持棒の左端に結んでおいた紐の残りを保持棒にそわせて、右へ約15～20センチごとに巻き止める (akaan Mbal) (図5-4)。

そして、保持棒に取り付けた繊維を3、4束に分け、これを巻き束ねて置く。

a-2. 繊維の糸状割り

下部経糸保持棒にラフィア繊維を取り付けると、このラフィア繊維を糸状に割く作

業となる。

まず、先端が二股状棒 Ikwotshy (I-/Ma-) を2本、約1メートルの間隔で、地面に突き立て、ここにラフィア繊維の束を止めた経糸保持棒を置く。または坐作業の際に使用する、パルミラ軸製の敷物のへりに仮止める。これらはラフィア繊維を糸に割く際に、保持棒を固定することによって、その作業を容易にするためであろう。

次に束ねておいたラフィア繊維の左側の1束をほどき、その左端の1本のラフィア繊維を取り出す。そして、葉先から2、30センチの位置で、テープ状のラフィア繊維を細かい布の場合には約2、3ミリ、粗い布用には約4、5ミリの幅に割っていく (atieng Mbal)。この時、割いた繊維の1本ごとに、右手の指ですくい、指の間に挟む。小割りが済むと、その右手を葉先に押し下げ、さらに葉柄部へと、上下させる (abaaan Piok)。1本の葉から8～10本の糸状の繊維 (以後、細かく割いた繊維を糸と

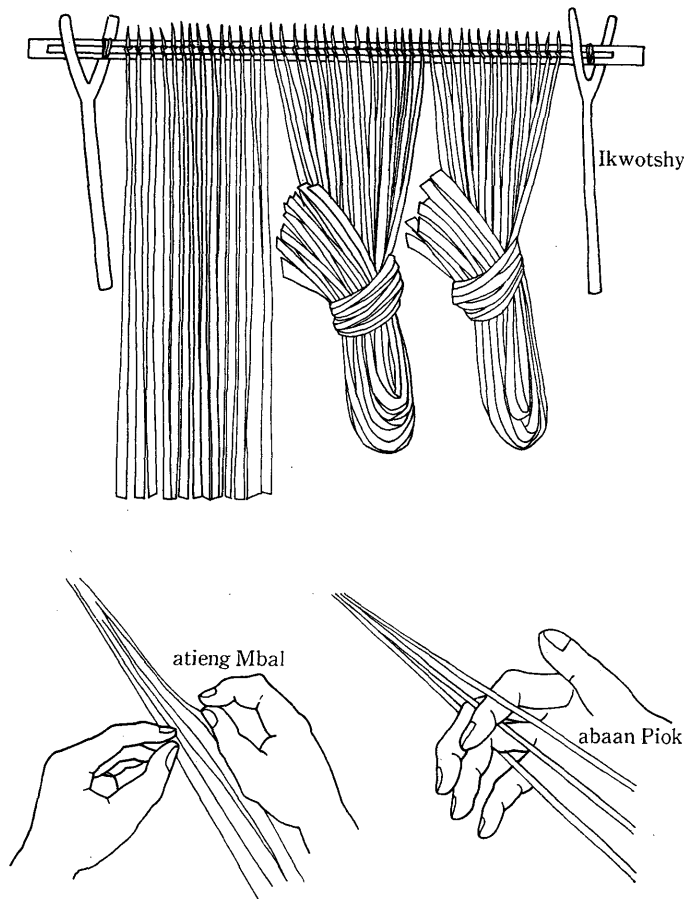


図6 繊維の小割り作業

呼ぶ)を得る。次々と繊維を取り出しては、細かく割き、糸状にする作業を繰り返す、通常、親指と人指し指を広げた幅まで、糸状に割くとこれを束ねては、保持棒にあるテープ状の繊維を割っていく(図6)。

a-3. 経糸の上・下糸の区分けとソウコウ通し

繊維を糸状にする経糸の準備が済むと、織作業のために経糸を上・下に区分けし、これを交互に操作するための開口具・ソウコウ(Mashel)を経糸に取り付ける、ソウコウ通し作業(abok Mbal Mashel)となる。

ムシェンゲ村のソウコウは、既に織作業に使用された緯糸(Piok yakul or Twengi)や細かく割いたラフィア糸を、約2,30本束ねて結び、長さ約15センチのところ、また結び、この結び目の両端を切り揃え、二つ折りにしたものである。このソウコウ糸の折れてできる輪に経糸を通していくが、この房状になったソウコウ糸は、織布の経糸密度によって使用する数が異なるものの、20~30房用意される。また、これらの

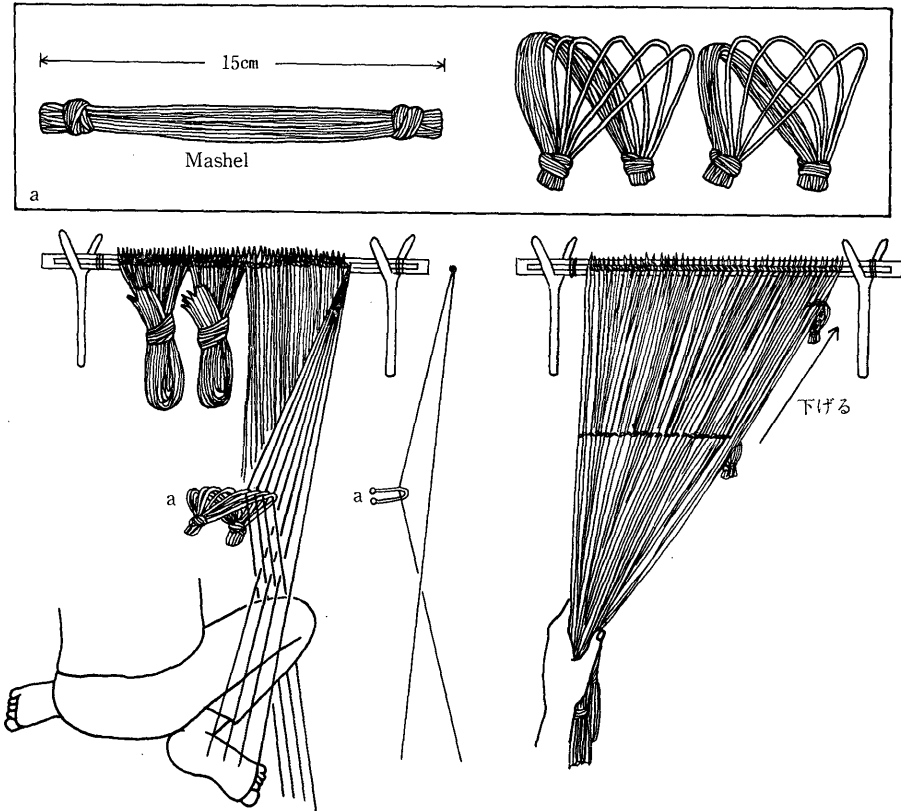


図7 経糸の上・下糸の区分けとソウコウ通し作業

ソウコウ糸の房を止める杵木があり、後述する機杵部に経糸を張る際に、ソウコウ糸に取り付けられる(図7-a)。

作業は、まず、右端の経糸の束をほどき、これをしごく。そして、右端の葉先の1枚分の糸をたぐり出し、他の糸を手前に置く。

この、たぐり出した糸から、まず、1本を右膝に置き、これを上糸とする。次に、二つ折れに重なっているソウコウ糸の、経糸を通す箇所を1本ごとに左指を入れて広げる。そして、この指に先のたぐり出した糸1本を導き、ソウコウ糸にくぐらせた後、右膝下に引き入れ、これを下糸とする。葉先の順を追って、糸を引き出しては、右膝上に上糸、ソウコウ糸に通した下糸は右膝下にと、交互に作業を続ける。

この経糸の区分を行なう時、その長さが足りない糸や、細過ぎる糸を取り除く。また、一房のソウコウには平均10本の経糸が通される。

ソウコウ通しを終えた経糸は、これを上糸、下糸別に葉柄部分で仮括りする。そして、この上・下糸を一つにして左手に持ち、手前に強く引く。張られた経糸に絡むような状態で施してあるソウコウの結び目を右手に持ち、これを経糸保持棒に引き下ろす。

次に、上糸の束を左手、下糸の束を右手に持ち、さばくようにして両手を広げ、その区分けをあきらかにする。そして、上糸を束ねた仮括りしておいた紐をほどき、これを三つに分けて束ねる。下糸も同様にして3束にする。

b. 機杵部への経糸の取り付け

b-1. 下部、横梁棒・経糸保持棒の取り付け

下部保持棒に経糸を取り付けると、この経糸を機杵部に張る。作業はまず、下部用横梁棒(Ngeng'dy)を杵部の前面となる位置に2メートルの間隔で立つ2本の杭の柄穴に入れ、これを据え付ける。この時、パルミュラヤシの繊維状の葉鞘(Kin)を7、8本、約30センチの長さに揃え、それを結んで作った輪(Mishuuk Bwoong Mbal)(図4)を2本、梁棒に通しておく。そして、この輪を8の字に撚り、できた小さな輪に下部経糸保持棒の両端を通して止める。

b-2. 上部、横梁棒・経糸保持棒の取り付け

次に、機杵部の後部にある2本の、高さ約2メートルの杭と、これに立て掛けた傾斜棒の先端から、それぞれ吊り下ろした紐で上部横梁棒(Nkaam)を結び止める。(図4、図8)この梁棒の中央から約3、40センチの左部分に、長さ約2メートルの紐の残りを梁棒に、約10センチの垂れ下がりをつけながら巻き付けていき、右部分で紐端を結び止める(nuim Nkaam)。

このいくつかの輪奈状に垂れ下がった紐に、長さ約1.2メートル、直径約2.5センチ

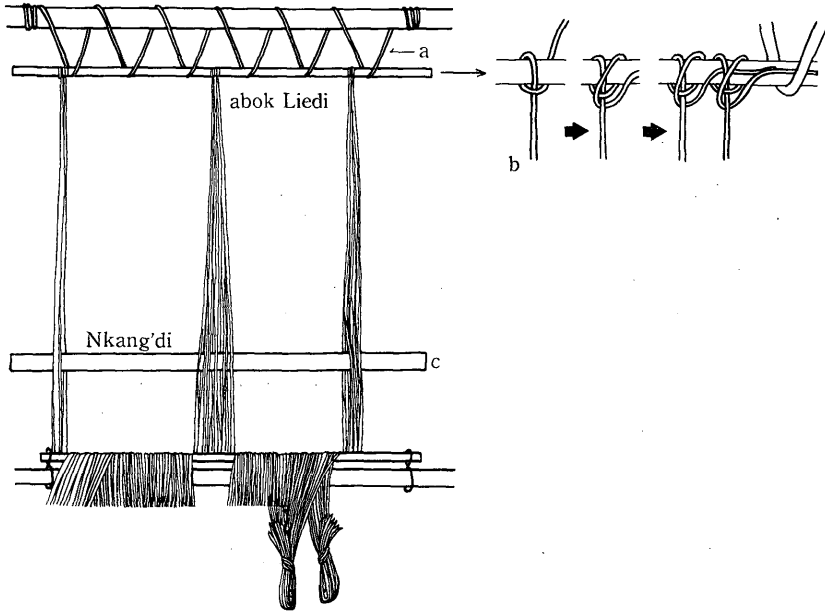


図8 上部横梁棒経糸保持棒の取り付けと経糸を張る作業

チの上部経糸保持棒を通し、これを下に引くようにしながら、左右に揺り動かす。すると不揃いであった紐の長さが整い、梁棒に対して経糸保持棒が次第に平行となっていく(図8-a)。

b-3. 経糸の取り付け

機枠部に経糸保持具の据え付けと、すでに下部経糸保持棒に取り付けた経糸を、上部経糸保持棒に張る作業となる。

まず、下部経糸保持棒に仮り括りしてある経糸の上・下糸の束の間に、可動式開口棒(中筒)を入れる。次に経糸の中央部分にある、上・下糸の束を解き、それぞれの束の中心部分から、約10本ずつの経糸を導き出す。そして、これらの経糸を引き揃えて、経糸の先を摘まみ、緩い撚りをかけ、これを上部経糸保持棒の下をくぐらせて、強く引き下げる。すると下部経糸保持棒から上部経糸保持棒の間に緊張した経糸が張れ、上部経糸保持棒をくぐらせた経糸の糸先を、これに巻き絡めて仮止める(muei mu Mbal)(図8-b)。

次に、下部経糸保持棒のの両端から、同様にして約10本の経糸を導き、それぞれを上部経糸保持棒に張る。すると3カ所から張った経糸に可動式開口棒が止った状態となる(図8-c)。そして、左端の経糸の束から順次、約10本ずつの経糸を取り出しては、上部経糸保持棒にこれを止める(abok Liedi)。この時、巻き絡めた経糸先の余まっ

た糸は、上部梁棒から張った紐が上部経糸保持棒に掛かった部分に、引き入れるようにして止める。そして、次に張る経糸を、先の経糸の余り糸の上から巻き付ける。順次、作業を進め、先に張った中央部分の経糸までくると、これを解き、糸の緩みを取り、新たに巻き止める。

またこの作業を繰り返し、経糸を張り終えると、上梁棒からの紐を強く引き、経糸全体の張りを調整する (ayemi Mbal)。

b-4. ソウコウ棒 (粹) の取り付け

経糸を張ると、下部保持棒に引き下げておいたソウコウ糸を1束ずつ、その結び目を持って経糸の中程まで引き上げる。そして、その位置を揃える (図 9-a)。

次に、パルミユラの軸から作った2本の棒、幅約2センチの半月形に削った、長さ約1メートルのソウコウ棒 (Lapuaph) を用意する。先ず、2本の棒の腹の部分に合わせて、その片端を長さ約2メートルの紐の端で結ぶ(既に、結び付けたものもある)。そして、棒の反対側の端を広げ、ここにソウコウ糸の束の結び目を出しながら、挟んでいく。この結び目が止め部分となる。そして、ソウコウ糸の間隔を調整し、製織作業に適した位置であるかを確認する。次に、ソウコウ棒の端にある紐を取り、棒に合わせ、約20センチごとに棒に絡めて結び止める (akaan ikwat Lapuaph) (図 9-b,c)。

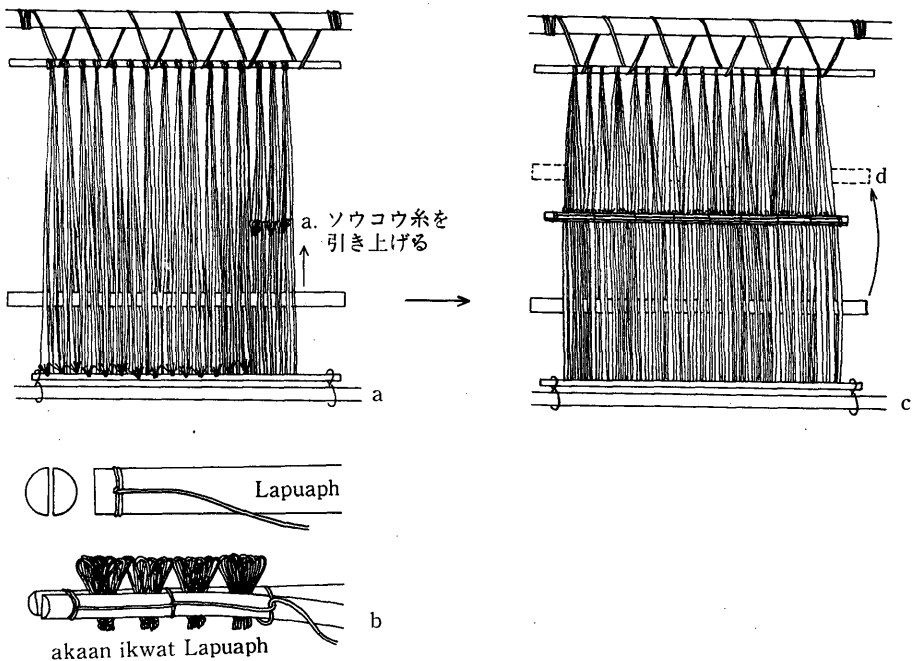


図9 ソウコウ棒の取り付け作業

b-5. 経糸の調整と織具の点検

上下経糸保持棒に張られた経糸を製織に必要な緊張度に調整する。次に、織具のソウコウ棒を上下に揺り動かし (ashushu Mashel), その操作に支障がないかを検べる。そして、(次項に述べる) 刀杼を可動式開口棒にそって経糸の間にいれる。次に、可動式開口棒を経糸から引き抜く。しかし、刀杼によって開口している経糸の糸口を広げ、ソウコウの上部に可動式開口棒を引き入れる (図 9-d)。

可動式開口棒による上糸、ソウコウによる下糸との経糸の上下糸が交互に開口するかを検べる。そして、張られた経糸の幅が、布幅として充分であるかを確認、経糸の準備を終える。

c. 製織作業

ムシエンゲにおける織作業 (abal Mbal) は、可動式開口棒と単ソウコウを交互に操作して、経糸を開口 (anan Mashel) させ、ここに刀杼を用いて、緯糸となるラフィア繊維を挿入して、布にする。

クバ族の刀杼は現地名イショク (Ishok 学名不明) と呼ぶ固木から作られ、長さ約 1メートル・幅約 3センチ、まるでソリのない日本の木刀といった形をしている。その刃先には、緯糸を引っかけるための切り込み (Dish) があり、これを現地では「目」を意味する言葉で呼ばれている⁴⁾ (図 10-a)。

織作業は、まず経糸にある可動式開口棒を経糸の下部に引き下げ、経糸を開口させる。この開口部分にパルミュラ軸を削って作った機草⁵⁾を挿入する。次に、可動式開口棒を経糸の上に押し上げると、ソウコウを下げ、これを手前に強く引く。すると下糸が上糸の前に出、経糸が開口する。ここに刀杼を入れ、両手でこれを下部経糸保持棒に向けて強く打ち込む (abol' Mbal)。そして、2本目の機草を挿入すると開口部をかえ、刀杼で打ち込む。この2本の機草を織り込むと、新たに経糸の間隔や幅を調整する。

緯糸となるラフィア繊維は、葉先を束ね、細かく糸状に割いてあり、この葉先を束ねた紐を機杼部となっている斜傾棒 (図 4, 図 10-b) に結ぶ (iyol' itwong)。

この緯糸の束から、1本の緯糸を取り出し、先の刀杼の目 (切り込み) に引っ掛け、刀杼を経糸から引き抜くと、緯糸が挿入する (ashom'l Ngontshi)。そして、可動式開口棒を機の上部に戻す。順次、可動式開口棒とソウコウを交互に操作し、緯糸を織

4) 日本の京都西陣には、クバ族の刀杼と似た「ヘラ」と呼ぶものがあり、引箔を布に織り込む際に、使用する。しかし、クバ族のように「切り込み」に対する、特別な呼称はない。

5) 機草 (ハタクサ)。本来は経糸を糸巻棒に巻き取る際に、糸層の間に巻き込むものをいう。

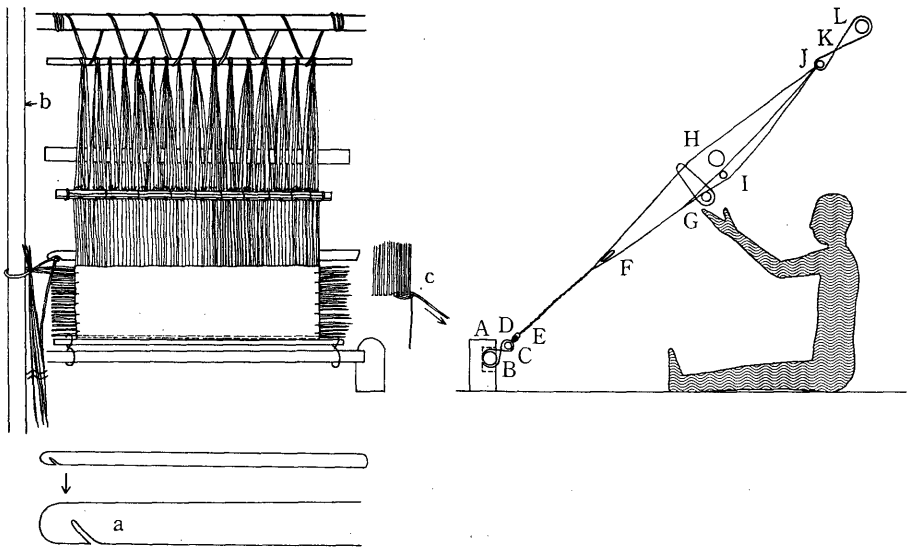


図10 製織作業と刀杼

り込んでいく。(この時、経糸が開口状態にあることを「女の状態 Ngaat lalat」、刀杼が経糸の間に挿入されていることを「男の状態 lulung」ともいう。また、刀杼を経糸に打ち込む度に、上下部横梁棒と、これを止めている柄穴や紐が擦れ、猿のなき声と似た音をたてる。そのため、上部横梁棒を雌猿 Ngandy Kem、下部横梁棒を雄猿 Nnumy a Kem と呼ぶ)

約1センチ余り織り上がると、引き出した次の緯糸を経糸の端5、6本目の位置に

表2 織機の名称

| 現地名 | 和名 |
|----------------------|------------|
| Bwoong a mbal | 機用道具一式 |
| A. Ikwok | つく |
| B. Nnumy a Kem | 下部横梁棒 |
| C. Kin | ククリ紐 |
| D. Kweya Mbal | 下部経糸保持棒 |
| E. Bantshi | 機草 |
| F. Ngohtshi Mbal | 刀杼 |
| G. Nkang'di Mashel | ソウコウ棒 |
| H. Nkang'di | 可動式開口棒(中筒) |
| I. Nkang'di (shiing) | 文様用可動式開口棒 |
| J. Nkaam | 上部経糸保持棒 |
| K. Liedi | 紐 |
| L. Ngandy kem | 上部横梁棒 |

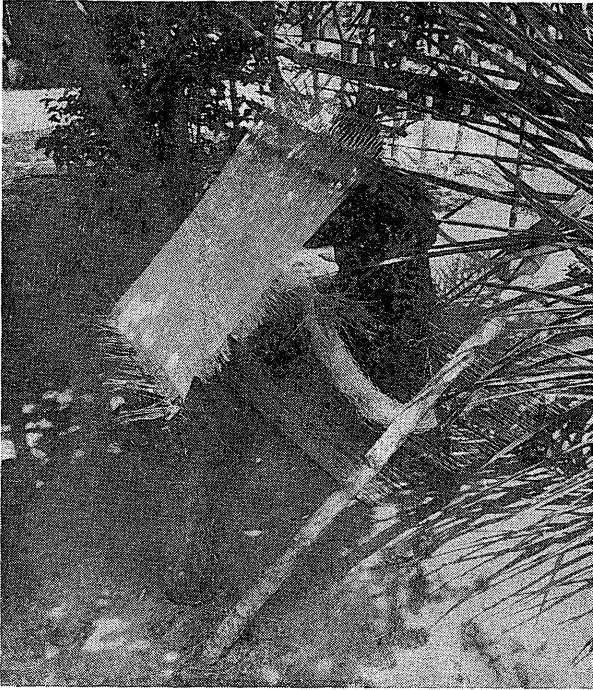


写真2 製織作業

通した後、刀杼の目に掛け織り込み、さらに、反対の経糸端（縁）でも同じように、織り終えた緯糸を経糸端5、6本目の位置に通して、絡める（図10-c）。この作業は、布を織り終えるまで、織幅を一定に保つために、約1センチごとに続けられる。また、布が織り進むにしたがい、経糸の張りが強くなるため、上部横梁棒に掛け下げた紐を、緩め調整を繰り返す（akwok'l Muan）（写真2、表2）。

このような経・緯糸が一本交互となる平織が、ムシェンゲに見られる一般的な織布である。経糸本数120～250とし、ラフィア繊維の太さを使い分けたり、緯糸打ち込み数を変え、使用目的に応じた平織布（Mbal）を作る。（粗い布 Mbal ntuong, 細かい布 Mbal ashep'l, 極細かい布 Mbal ipone）また、経糸に色の変化をつけて、平織による縞文様や網代文様⁶⁾（Ishaang ntshietshi）を織る（図11-a）。

しかし、この平織組織の経糸に、文様用可動開口棒（Nkang'di）を別に取り付け、経糸の一部を浮かせた紋織（Shiing）（図11-b）がある。

こうした製織作業は、通常、織幅約60センチ、長さ8、90センチの大きさの布、1

6) 網代（アジロ）文様。経糸2色を1本交互に配し、一定間隔でこの配列を逆にして、繰り返して、整経する。緯糸は経糸の1色で一定間隔で平織し、次に他の1色をと、交互に織り進めると、網代、または籠目のような文様ができる。現地では、この文様をホロホロ鳥を意味する。

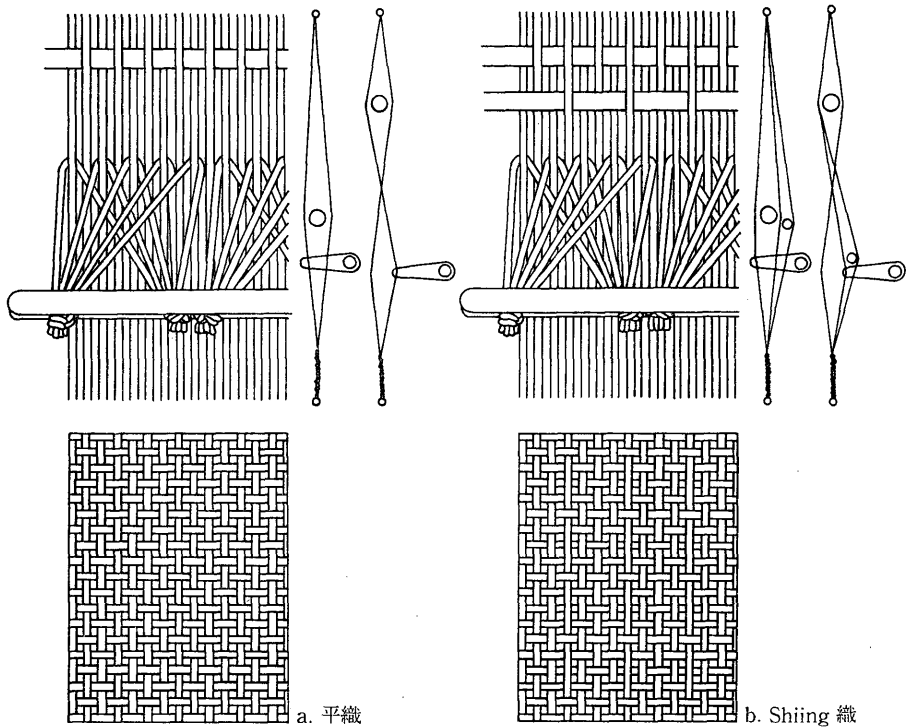


図11 織操作と組織図

枚を半日で織り終える。そして、布は作業の際に職人に面していた織表(オリオモテ)が、使用時には布裏(Mbush bu Mbal) 織裏(オリウラ)が布表(Bosh bu Mbal)となる。これら布の表・裏面にでた、短かな緯糸の繊維を切り整える。また、布の両縁(耳)(makuop'l ma Mbal)からはみだした状態の緯糸を、3、4センチの房状に残して、切り揃える。

また、製織に使用されるラフィア糸は、経糸の場合、織り下部分(Mashin ma Mbal)が葉先、織り上部分(Shosh' a Mbal)が葉柄近くとなり、繊維の生育上、自ずから織り上がっていく程に、織幅が僅かに広がる。これは緯糸の場合も同様で、布の左右も微妙に幅が異なる。

織り終えた布は、機の上下にある経糸部分を切り落とし、布の上下、それぞれから中心に向かうようにして巻き畳んで、置く。

織り作業は男たちによって行なわれ、織られた布は、その種類によって異なるものの、1枚50~200 zaïreで売られる。また、妻のある者は必ず織った布枚数の半分を、妻に与える。

3. 布の仕立て

ラフィア布は、前述したように約60×80センチに織られる。クバ族の間では、これを縫合し、長い裳布幅約1メートル、長さ6、7メートルに仕立てる。かつては、日常衣・儀礼衣として使用されたが、現在の衣料品の変化によって、日常にラフィア布で仕立てた単純な腰衣を使用する者は少なく、老人たちの間に僅かに見かけるのみである。しかし、王の臨席するダンスの日、あるいは儀礼の日に、さまざまな色と刺繡による、華美なラフィア衣裳が使用される。また、これらの衣裳は、「晴れ着」であるとともに、使用者の葬儀における「死に装束」となる。そのため、村のいたる所で手間暇を掛けた、仕立て作業を見かけることができる。

その作業は、男女の衣裳によって、多少異なるもの、砧打ち、布縁かがり、染色、刺繡、縫合の順を追って仕立てられる。本項では、女たちの作業に従って記述していく。

a. 縫いおよび刺繡糸の準備

a-1. 糸の準備

布の準備が整うと、これを縫合し、文様を表現するための、糸の準備を行なう。ラフィアの葉から繊維を採る方法については、既に、述べたが、この乾燥した繊維(piok ikany)から、縫い用の糸を準備する。

まず、ラフィア繊維を約2、30本、葉先を揃えて束ね、この葉先部分(Mitshuey)を、紐で強く巻き括る(akaan mitshuey Mipik)。そして、別の紐を葉先に結び、これを柱または立木に結ぶ。

次に、巻具(Koph')の口縁部を口縁部を先のラフィア繊維にあて、これを上から下へ、強くしごいていく(akuul' Piok) (写真3)。そして、途中でこの手を休め、繊維を手でもみ込み(ayou Piok)、また、巻具でのしごき作業を続け、約10分程でラフィア繊維がしなやかになる(Piok yakuul' 写真3)。(染色はこの繊維状態で行なわれる)

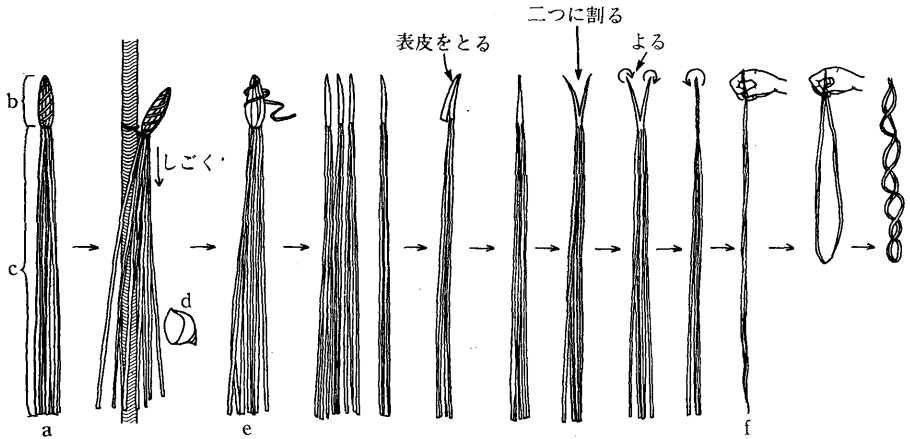
柔らかくした繊維の束を解き、まず、繊維を1本ずつ、並べていく(aphuul' Piok a Mwany)。その1本を取り上げ、葉先に残っている表皮部分を取り除く(atey Ma-kwom')。次に、この葉先の部分を二つに割り(atienyl')、ここに唾(Mashony)をつけて湿す。そして、この葉先部分を腿の上のせ、その上に掌のひらを当てて押し出す。すると、2本の繊維に撚りがかかり、この手を手前に引き戻すと、葉先部分が1



写真3 繊維を貝でしごいて、柔らかくする作業

本の糸に撚り合せられる (ashing Miot)。この葉先の部分をゆっくりと持ち上げると、下部分の繊維にも、軽く撚りがかかり (shing Mwot), これを縫い糸や刺繍糸 (Mwot mu bwin) とする。

できあがった糸は、その上下を合わせて、荒捻じした紐状 (amwin Miot) にし、さ



- a. Piok ikany
- b. Mitshuey
- c. Piok
- d. Koph'
- e. Piok yakuul'
- f. Mwot mu Bwin

図12 縫い糸の準備作業

らに、これを束ねて三編みにしておく (alweng Miot) (図12)。

a-2. 染色

前述したように、染色作業は繊維が糸にされる前、あるいは布を縫合して、大きな裳布に仕立て上げられた後になされる。クバ族の染色 (ayine) は、調査時においてはすべての染料が天然素材であった。しかし、化学染料の流入もあるらしく、採集した布の一部にこれを使用しているものを見た。

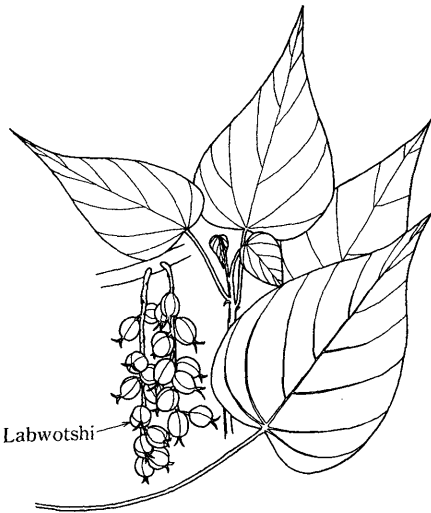
「黒色 Nduemy」 黒染めには2種類の植物が使用される。1種がンドゥ・ルプ (Ndu luup) (学名不明 図13) の葉である。もう1種がトウダイグサ科の *Alehorhea cordifolia* 種の植物 Ibwbwotshi (図

14) の葉と、この木になる実 (La/M-bwotshi) の外皮である。ともに低木で、原野、河辺に自生するものを採集する。その主成分はタンニンである。

集められた植物から、まず、大きな茎を取り除き、軽く水洗いした後、木臼に入れ



Ndu Luup (現地名)
図13 黒染め用染料



Alehorhea cordifolia Euphorbiaceae
図14 黒染め用染料

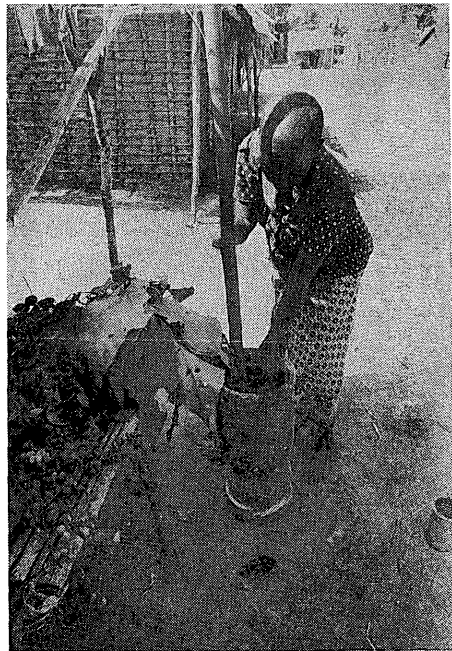


写真4 黒染め用の植物染料、2種類を混ぜ、臼でつぶす作業

る。これを杵で打ち砕く。次に、鉄製の容器 (Kaphans) に水 (Mash) を入れ、先に砕いた植物を水の中でよくもむ (ashin)。これを絞り (ayam)、外に出すと、新しい植物を木臼に入れ、杵で打ち、同作業を繰り返す、必要量の植物を砕く (写真4)。

染色助材 (媒染) として、昔の鍛冶屋跡 (Indodi inba Ntudi) から掘り出してきた、金屎⁷⁾ (Iyedi) を細かく砕き、これを容器に入れる。貝でしごいたラフィア繊維を用意し、その下部分から容器にたたむようにして入れる。そして、砕いておいた植物の一部を、上から覆うようにして重ねる。この時、ラフィアの葉先は、液の外に出るようにしておく。この上に、さらに金屎の粒、植物、と重ねる。

これを陽の良く当る場所に、夕方まで置く。(染液は次第に黒ずんでいく) 夜、炉 (I/Ma-twuuk) の上に容器をかけ、途中、数回、水を加えながら朝方までトロ火で焚き続ける。

翌朝、染液からラフィア繊維を取り出し、乾燥させる。

「黄色 Nkaanng」 黄色染めには、茜科の *morinda geminata* 種の植物 (bwobu Ntei) の、幹および根が用いられる。村の周辺から集められた染材をかつては陶製壺 (Pueky) に、現在はアルミニウム製の鍋に入れる。ここに温湯を加え、次に、ラフィア繊維を入れ、火にかけ、約30分煮沸する。黄色に染まった繊維を取り出し、乾燥する。



Baphia nitida Afzel

図15 赤色染料・カムウッド

「赤色 Twol²⁾」 赤色染めに使用する染料は、マメ科のカムウッド (Twol²⁾-*Baphia nitida Afzel* 図15) である。クバ族の居住地域には生育せず、サンクル河を越えた地域から、クバ族ショワグループを経て、ムシエンゲまで運ばれてくる。かつて、これらの地域における重要な交易品であった。丸太材の状態 (Nte mu Twol²⁾) や、これを砕き粉にし、塑像のように固めたもの (Twol²⁾) がある。染色の場合は、いずれも粉末にして使用され、その作業は黄色染めと同じである。

また、近年、このカムウッドの代用品として、近隣のルバ (Luba) 族によってもたらされた、アメリカ原産の栽培植物、ベニノキ科ベニノ

7) 金屎 (カナクソ)。砂鉄から製鉄をする際に、できる鉄を含んだカス。

キ⁸⁾ (*Twol' te balup-Bixa orellana L.* 図16) の種衣を使用して、赤色を染める者もいる。

「灰(バナナ) Butok」 灰染めの材料は、バナナ(I/M-mabot)の枯れた葉(kaash Mabot)を集め、これを燃やして得る灰を用いる。容器に灰と水を入れ、この中で、採集直後のラフィア繊維をもみ込み、約1時間置いた後に、乾燥させる。

染め上がった色は、淡いオリーブグリーンとなる。(これはラフィア繊維に含まれた、フラボノールやタンニン色素が灰汁のアルカリに溶け、また、灰そのものがもつカーボンブラックとが、微妙に混合した色となったのであろうと思われる。)

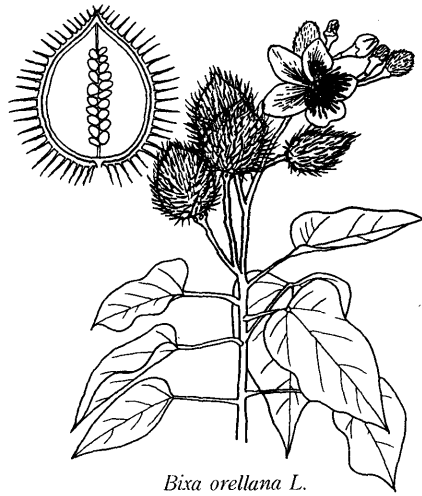
また、前述した染料を重ねて使用し、その混色を得る。例えば、黒染めの残液に、繊維や布をくぐらせた後、キャッサバ粉でもみ込み、灰茶色を得るなどがある。

「その他」 染色作業の他に、生成りの繊維を加工して、漂白、着色する方法がある。

白色(漂白)の場合は、採集直後の繊維、それも生育2、3年といった、若いラフィアから採取した葉を脱色する。5、6枚を単位とし、葉の表皮を取り、葉先のみを撚る。次に、この繊維の束を細かくたたみ、これを口の中に入れ噛む。途中、何度も口中に溜る唾を、吐き出す。その唾がライトグリーンから次第に、白くなっていく。約20~30分間噛み(asham'l Piok)続けると、これを水染する。そして、キャッサバ(Manut)の白い粉(Phuph')の中でもみ、乾燥する。

茶褐色は繊維を、家の中の炉近くに吊り、長い間放置し、炉から出る煙で薫して得る。

糸の準備をすすめている間に、布の準備も行なわれる。



Bixa orellana L.

図16 赤色染料・ベニノキ

8) ベニノキの赤い種衣には、ピキシシ(カロチノイド)があり、アルカリや酸に強い。チョコレート、マーガリンの着色材や染料に使用される。

b. 布の準備・砧打ち

ムシェンゲ村、あるいは他の村から入手された布は、日本の畳表のように、かたく、経緯糸がなじんでいない。そこで、布目をつぶして柔らかくし、また、布面を滑らかにして艶を出す、砧打ち (ato Mbal) 作業を行なう。

作業は布を仕立てる者が自ら行なう場合と、この作業を得意とする者に依頼する場合がある。人に依頼する場合は、通常、同量の布枚数、あるいは5枚単位で50~100 zaire を支払う。この時、必ず、約5リットルのヤシ酒 (Maan) を添える。

作業は、製織した布 (Mbal Nkanyi) を直径約25センチ・高さ約50センチを、布仕上げ用の木臼 (Lolin i Mbal) (図17) に入れ、直径約5、6センチ・長さ約200センチの棒状の杵 (N/Mi-tstuutsh mi Mbal), 2本で突く (ato Mbal)。時々、少量の水を加え (atshik Mash) ながら、約2時間、一定した強度で布を打ち続ける (akolol' Mbal) (図17)。

次に、この布を木臼から取り出し、二つ折りにして広げ、これをタテ約60センチ、

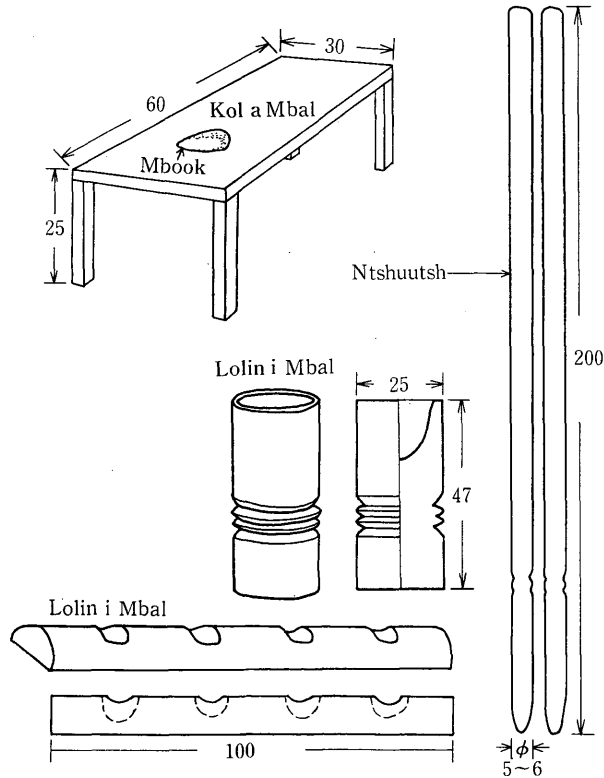


図17 砧打ちの道具



写真5 砧打ち作業（木臼でついた布を木台にひろげて擦る作業）

ヨコ約30センチの木製の台 (kol a Mbal) の上に置く。そして、15センチ大の包丁の形をした石 (Mbook), あるいはホウロウ製の小さな蓋などを用意し、広げた布の表面に押しつけながら、強く擦り (asheiem'l Mbal) (写真5, 図17), 時々、布の位置や表裏を折り変え、布全体を擦り続ける。

その後、水洗 (akutuul Mbal) する。すると、繊維に付着していた繊維素が取れたのであろうか、水が汚濁する。そして、布を絞り、軒下で乾燥 (aneng) する。

乾燥した布は、翌日、再度同じ行程を繰り返す。砧打ちを終えた布は滑らかな風合いの布 (Mbal yats) となる。その後、直径約20センチ、高さ約25センチの丸太の固木で作った台 (Ishuuk buun a Mbal) (図18) に、布を広げ、直径約6センチ、高さ90センチ余りの棒を杵 (Ntshiitsh mu buun Mbal) とし、この切り口部分を布に押し当てるように、緩やかに布を打つ (abuudul' Mbal)。

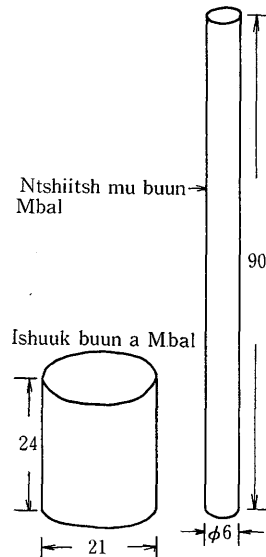


図18 砧打ちの道具（乾燥させた布の砧打ちに使用する）

c. 刺繡および縫合

c-1. 布の縁かがり

砧打ちを終えた布は、その縁辺を整え、縫いかがられる。そして、裳布の仕立てに必要な布量のすべての布は、1枚ずつ、その縁辺をかがってゆく。

まず、布の縁辺からでている糸をハサミで切り落す (abat! Mashashel')。そして、四方の縁辺を約1センチ幅に折り、これを指でしごいて折シワをつけ、さらに三つ折り (amuunyi Mbal) にする。この時、隣合う2辺は表に、他の向かい合う2辺は裏に折るようにする。

次いで、この三つの折り部分を粗い平縫い (abok Lapiok) で仮縫いする。この時、針 (Ndwoong) の穴に通す縫い糸は、その糸の先、約2、3センチで折り返し、縫い糸に撚り絡らめて止める。

そして、三つ折りした布の部分と、地となる布の重なった部分を上にして折り、しごいて折りシワをつける。次に、パルミユラ軸製の長さ約60センチ、幅約1センチ、その両先端を削って尖らせた伸子張 (labantshy la Liedy/Nbantshy i Ntshiedy) を、布の1辺の両端に刺して、布を張る (写真6)。その布端からフランス刺繡のボタンホール・Sという技法に似た、縫いかがり (atum Maphel') を行ない、布の四方の縁辺をかがる。

裳布に必要な布量のすべての布が、1枚ずつ、縁辺がかがられた後に、縫合し、刺繡される。



写真6 伸子を使った布の縁かがり作業。仮縫

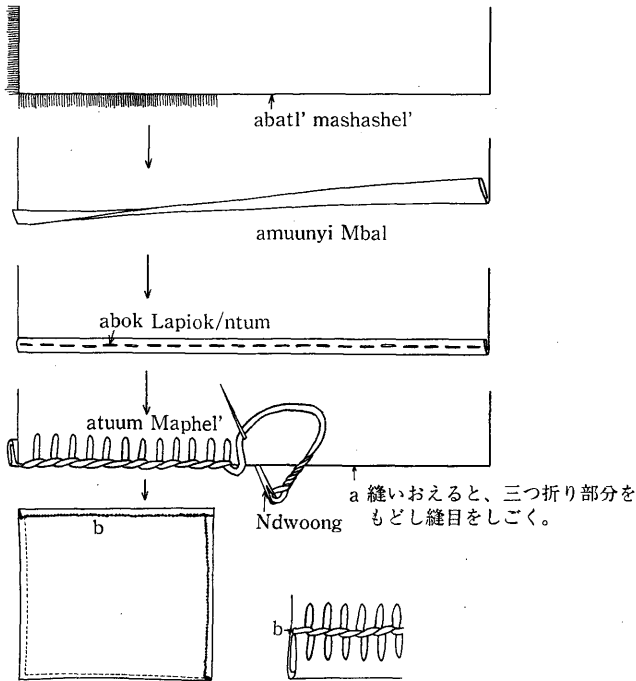


図19 布かがり作業の行程

c-2. 刺 繡

縁かがりを終えた布は、その布にさまざまな色糸と刺繡 (atum Bwuin) 技法によって、クバ族独特の文様を表現する。

作業は、先ず、縁かがりの終えた布の1辺に、別の大きなあて布 (Mbwon mu Bwuin) を縫い付ける。この布は、刺繡作業の際に、仕上げるべき布に適度な重りとなって、張りをあたえ、作業が容易となる。また、作業をしていない時の布 (Bwuin bua bet'm a Mbwon) の覆いともなるものである (写真7, 図21)。

刺繡作業の際、見習い中の者は、時に下図 (ashol' Bwuin) を描くものもいるが、一般的には、布に各人が知る文様を直接、刺していく。調査の際に観察した技法は8種類であり (図20)、刺繡技術としては簡単なものが多い。しかし、古い布や村の僅かな女性の間には伝えられる技法、ミシンミバル (mishing Mibal) などのように、複雑な技法もある。また、通常の縫い糸は片撚糸を使用するが、特別な刺繡の際には、双糸の強撚糸 (asing Miot) をを使う⁹⁾。

9) 片撚糸、双 (諸) 撚糸。繊維を引き揃えて撚りを加える際、1本のみのもを片撚糸。2本を引きそろえ、片撚りの時と同じ方向に撚りをかけた後、これを逆の方向にかけ合わせたものを双糸という。



写真7

刺繡作業。ランバット技法による刺繡，手前に広げられているのがあて布。その上に縫い糸とナイフがある

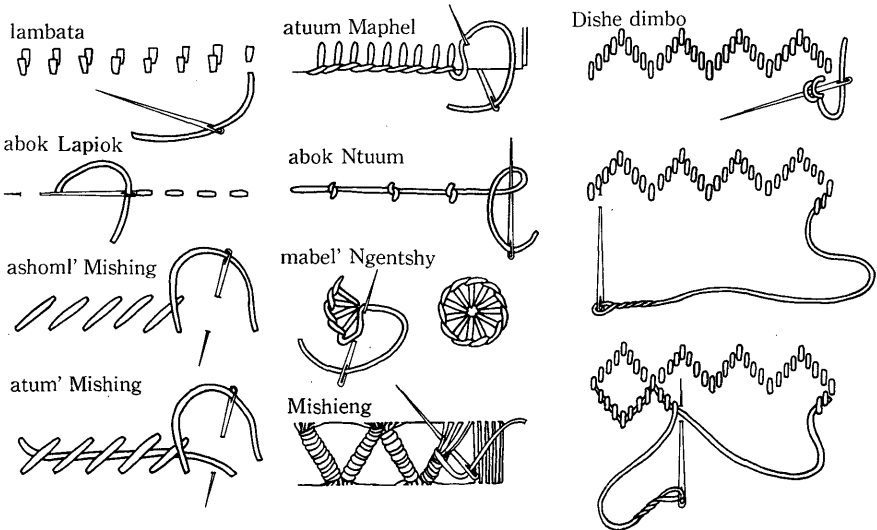


図20 ムシェンゲ村における刺繡技法

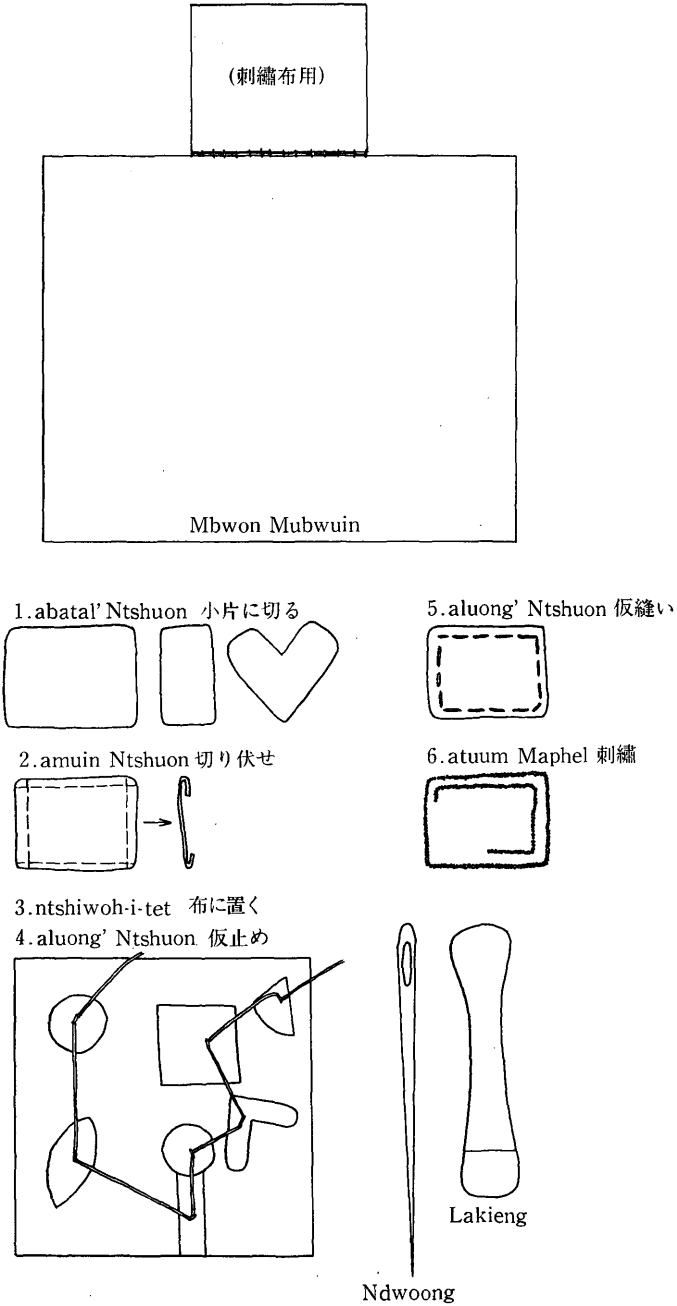


図21 切り詰め刺繡の作業行程

女たちが仕立てる裳布 (Maphel) の中で、もっとも多く見かける刺繍が、日本で言う切り嵌め刺繍、通称、アップリケである。現地では「つぎあて (abok Ntshuon)」を意味し、これは本来、砧打ち作業の際にできた、布の痛みや破れを補修するための技術であった、と思われる (図21)。

切嵌刺繍の作業は、先ず、別に用意した布から、小片を切り取る (abata'l Ntshuon)。そして、この小片の布縁、約4、5ミリを折る (amuin Ntshuon)。次に、これらの小片を地となる布の上に、その位置を考えながら置き (Ntshiwon i tet)、ラフィア糸で仮止める (aloug' Ntshuon) と、さらに、小片の縁にそって、仮縫いする。そして、この小片と地布の重なった縁をつまみ上げて折り、かがり縫い (図 19, 20 atuom Maphel) する。

このような刺繍作業と縫合を繰り返し、長さ約7メートル、幅約1メートルの裳布等に仕立て上げる。

c-3. 文 様

裳布を含む、クバ族の文様は、彼らを取り巻く、自然から得たモチーフ、あるいは籠などの網技術からヒントを得た、と思われる幾何文様からなる。この文様群については、既に、多くの研究がなされ、中でも J. コルネ著「*Art Royal Kuba*」, 第5章に詳しく報告されている [CORNET 1982]。そのため、本項では女性用裳布に使用される切嵌め刺繍の文様について、触れることにする。

前述したように、切嵌め刺繍は、本来「つぎあて」から考え出されたものである。

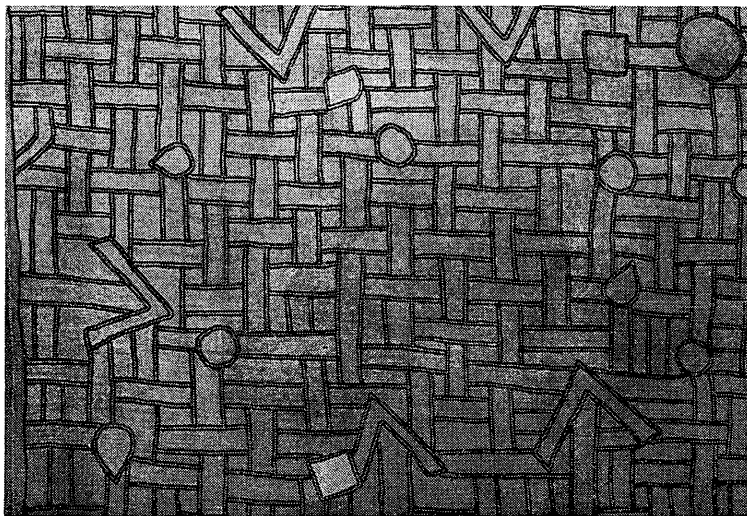


写真 8 切り嵌め刺繍をほどこされた女性用裳布

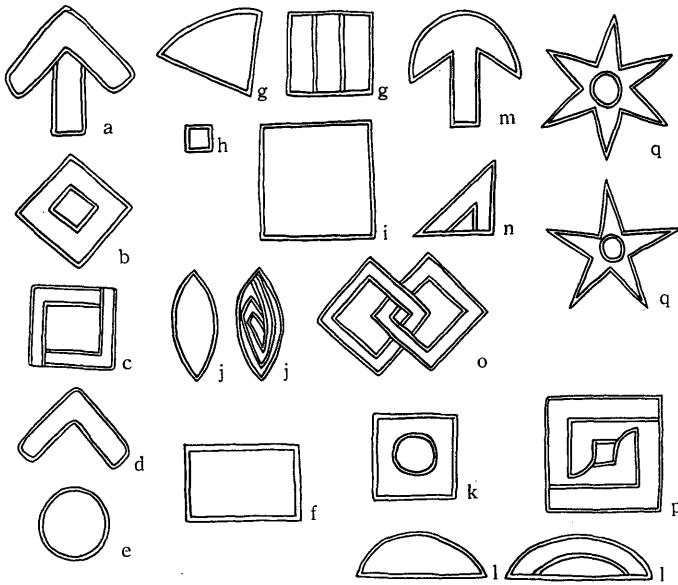


図22 切り嵌め刺繍に見られる紋様

他の裳布や工芸にみる文様が、整然とした幾何文様であるのに対して、その作業上から崩れた幾何文様、つまり、表現される線が丸味をおびたものとなる。

尚、名称については、刺繍技術にたけた王宮 (Dwengy) 女たちの呼称を表記する (図22)。

- | | | |
|----|----------------------|--------------|
| a. | Nshi na Mbo または Mpe | ナイフ, 斧 |
| b. | Lapuontshi | ? |
| c. | Ikuun i woot | 眠る Woot (人名) |
| d. | Nshi namna | ナイフ |
| e. | Ilo a luengy | 丸 |
| f. | Ikweepy | 長持 |
| g. | Lass/Kas | 意味不明 |
| h. | Luon kakiek | 小さい矩形 |
| i. | Luon lanen | 大きい矩形 |
| j. | Buwat | 舟 |
| k. | Ikuun i Woot yatshik | 丸と四角 |
| | ilueng a leeng | |
| l. | Ngwon | 月 |

| | |
|----------------------|--------------|
| m. Ikuong bankut | Nkutu 族の槍 |
| n. Yaas ikieng | 斧が半分に分れたもの |
| o. Pisalaam | 意味不明（一纏めの刺繍） |
| p. Pisalaam | 意味不明 |
| q. Mish ma Mbo mipey | 2本のナイフ |
| r. Muedi | 星 |

4. 結 び に

以上、クバ族・プションググループにおける、ラフィア染織布の製作技法を、その行程を追って報告した。しかしながら、その製作行程が多岐にわたるため、調査目的の「垂直機」の製織技術を主として記述し、他の行程については、これまでに報告された資料との重複をできるだけさけることにした。

また、今回の調査は極めて概括的な予備調査にすぎないため、クバ族のラフィア衣装については、彼らの社会生活において、「晴れ着」「死に装束」の他に、どのような位置を示す存在であるのか、またカムウッドの交易などにみられる、染織素材に関わる社会的背景についても、その調査に着手したばかりである。そのため、報告の段階にいたっていない。

しかし、これらはクバ族の染織技術を探る上で、最も重要な問題点となる。例えば、調査中に王の母 (Inanyimi) より、筆者にラフィア布に包まれた贈り物が届けられた。村ではこの包布に「お返し (Nkukun) の布」を入れて、王家に戻す習慣がある。(Nkukun は本来、王の奴隷 (Basho ba nym) の中から、王族の葬礼の際に、その伴葬に選ばれたものを意味したという) そして、王家には、仕立屋 (Binn) が5、6人かかえられ、彼らを監督指導する「王の仕立屋 (Nyimbiin Muedi)」がいるにもかかわらず、「王の織師」の存在がない。すると、王家で使用する布は、何処で織られるのか。何故、王家に織師が存在しないのか。といったことから、村々から王への貢物 (Bunyimi) の一つとしての、布の重要な存在が浮かび上がってきた。また、刺繍に最もたけるといいうのも、他のクバ族グループから嫁いできた王の妻たちである。

この、何故、王家に織師が存在しないのか、という問題は、プションググループの織技術、あるいはクバ族そのものの、「織布の存在」について、考えてみる必要があると思われる。

このような新たな疑問を結びにかえたい。

謝 辞

この調査には多くの方々にお世話になった。大阪芸術大学・森淳教授の御指導は言うに及ばず、国立民族学博物館・和田正平教授、京都大学・伊谷純一郎教授、市川光雄助教授には調査地への御助言、調査への示唆をいただき、心から謝意を表します。また、現地調査においては国立音楽大学・渡辺公三助教授に御協力をいただき御礼を申し上げます。

追 記

本調査は、1986年度文部省科学研究費（代表、大阪芸術大学・森淳教授）による。また、この原稿をまとめるにあたり、国立民族学博物館・共同研究プロジェクト「アフリカ諸民族の技術誌の整理と分析」（代表者、同博物館、和田正平教授）の研究会において、報告を行い、同研究メンバーの皆さまより、多くの有益な御助言をいただいたことを感謝いたします。

文 献

- ボーム, ドニーズ
『アフリカの民族と文化』川田順造訳 白水社。
CAVAZZI, P. Giovanni
1967 *Istoria descrizione di tre regni Congo*. Bologna: Matamba et Angola.
CONNAH, Graham
1975 *The Archaeology of Benin*. Oxford: Clarendon Press.
CORNET, Joseph
1982 *Art Royal Kuba*. Milano: Sipiel.
板倉寿郎・他
1977 『原色染織大辞典』淡交社。
KARL-FERDINAND Schaedle
1987 *Le Tissage en Afrique*. Panterra Verlag.
川田順造
1979 『サバンナの博物誌』新潮選書。
LAMB, Venice & Judy HOLMES
1980 *Nigerian Weaving*. Roxford.
LAMB, Venice & Alastair LAMB
1981 *Au Cameroun: Weaving Tissage*. Roxford.
1984 *Sierra Leone Weaving*. Roxford.
LOIR, Hélène
1935 *Le tissage du raphia au Congo Belge*. Musée du Congo Belge.
PICKTON, John & John MACK
1979 *African Textiles*. British Museum.
RYDER, Alan Frederick Charles
1969 *Benin and the Europeans 1485-1897*. London: Humanities Press. (Reprint London Longman, 1977.)
TORDAY, E. & T. A. JOYCE
1910 *Notes ethnographiques sur les peuples communément appelés Bakuba, ainsi que sur les peuplades apparentées: Les Bushongo Annales*. Musée du Congo Belge.
TORDAY, E.
1925a *On the Trail of the Bushongo*. London: Seeley.

- 1925b *Camp on tramp in Africa Wilds*. London: Seeley.
- 渡辺清彦・他
1969 『熱帯植物集成』 広川書店。
- 渡辺公三
1985 「クバの織物——生を彩る布・死を包む布」『イメージの冒険——アフリカ美術展』カタログ社。
- 吉本 忍
1987 「手織機の構造・機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告』12(2): 315-447。